



近世说美少年録

九編

一

~ 13
3567
41



13
567
41

曲亭翁口授編

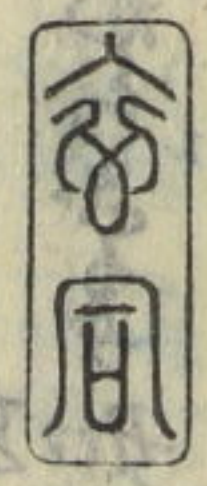
早稲田大學圖書館
昭和34.6.3
藏書

近世説美少車録 五冊

一陽齋豊國畫

文榮堂 精刊
群玉堂

新編石童子訓第六版小序



長夏の竹林老鶯鳴く秀色見るとも清風枕ふ暢々主人
枕邊在り即問て曰和漢の文人其博識者経籍史傳の
人小教びて稗史物の本と著してて虚名と高うある其好所益
るはあらずや主人答て曰經学の人益ある素より其所然れども克勤
学者稀へ稗史物の本の如し書と讀とを好む者も歡で是を讀
是をりて論易く客呵々と冷笑て曰主公羽の言違へ稗史物の本
寓言ゆへに實多し何の教欬是ありん日まうらと是と作る者深淺あり

石童子訓第六版

壹

文榮堂

浅^{あさ}の名利^{めいり}と^と言^いと^く漫^{まん}時^じ好^{こう}媚^びる^る而^{して}已^ま吾^{われ}其^{その}教^{きょう}の有^あ無^なと^も知^しら^ず深^{ふか}
 然^{しか}る^るに^も則^{すなは}其^{その}学^{がく}問^{もん}螢^{えい}雪^{せつ}の^の餘^{あま}力^{りき}と^も偶^{あや}這^こ個^{この}の^の筆^{ひつ}と^もあり^し其^{その}書^{しよ}他^たと^も相^あ
 似^にて^も意^い匠^{しやう}同^{どう}と^も克^{よく}看^{かん}者^{しや}は^は是^{こゝ}と^も大^{だい}筆^{ひつ}と^も大^{だい}筆^{ひつ}の^の作^{さく}所^{しよ}博^{はく}く^く譬^{へい}言^{げん}を
 取^とて^もの^の蒙^{もう}昧^{まい}を^も醒^さま^し在^あり^し孔^{こう}聖^{せい}是^{こゝ}を^も仁^に近^{ちか}と^も益^{えき}諫^{けん}ふ^ふ五^ご諫^{けん}あり
 諷^{ふう}諫^{けん}と^も第^{だい}一^{いつ}と^も忠^{ちゆう}臣^{しん}孝^{かう}子^し良^{りやう}友^{ゆう}の^の君^{きん}父^ふを^も諫^{けん}其^{その}友^{ゆう}を^も諫^{けん}ふ^ふ專^{せん}彼^か
 非^ひと^も擧^あげ^て犯^{はん}時^じは^はく^く聽^きる^る者^{しや}あ^らむ^も甚^{こゝろ}に^も至^{いた}る^る比^ひ于^よ伍^ご子^し走^{そう}り^し如^{ごと}
 身^みを^も殺^{ころ}し^て功^{こう}を^も益^{えき}る^る其^{その}國^{こく}亡^なび^て忠^{ちゆう}臣^{しん}の^の名^なあり^し這^こ故^{この}も^も克^{よく}諫^{けん}る
 者^{しや}ハ^は犯^{はん}し^て怒^{いか}ふ^ふ觸^ふれ^ると^も懼^{おそ}る^る是^{こゝ}と^も譬^{へい}言^{げん}を^も取^とり^て擬^なへ^ると^も悟^{さと}ら^る其^{その}
 言^{げん}毫^ごも^も耳^{みみ}に^も逆^{さか}る^る猶^{なほ}良^{りやう}藥^{やく}ふ^ふと^も口^{くち}に^も苦^くから^るが^が如^{ごと}く^も因^より^て命^{いのち}つ^つけ^る

諷^{ふう}諫^{けん}と^も云^い彼^か大^{だい}筆^{ひつ}の^の稗^{はい}史^し物^{ぶつ}の^の本^{ほん}と^も作^{さく}る^るも^も亦^{また}是^{こゝ}に^も似^にる^るあり^し或^{ある}は^は故^{こゝ}
 事^{こと}に^も假^か託^{たく}し^て古^こ人^{にん}の^の姓^{せい}名^{めい}を^も借^か用^{よう}と^もて^ての^の善^{ぜん}惡^{あく}應^{おう}報^{ほう}の^の理^りを^も詳^{しょう}に^も
 博^{はく}く^く譬^{へい}言^{げん}を^も取^とる^るは^はあ^らむ^も是^{こゝ}を^も教^{きょう}と^もし^て論^{ろん}を^も廣^{ひろ}く^く實^{じつ}を^もら^るむ^もと^も其^{その}あり^し
 實^{じつ}也^{なり}老^{らう}莊^{じやう}の^の虛^{きょ}無^む寓^う言^{げん}浮^う屠^と家^かの^の所^{しよ}謂^い善^{ぜん}功^{こう}方^{ほう}便^{べん}悟^ごる^る者^{しや}ハ
 裨^ひ益^{えき}あり^し其^{その}然^{しか}ら^るむ^もや^や然^{しか}ら^るむ^も客^{きやく}猶^{なほ}諾^{だく}る^る色^{いろ}あり^し主^{しゆ}人^{にん}其^{その}負^おけ^けト
 心^{こゝろ}あり^しと^も見^みて^も又^{また}枕^{まくら}と^も史^しを^も陽^{やう}睡^{すい}と^も復^{また}共^{とも}に^も言^{げん}を^も折^せら^る文^{ぶん}溪^{けい}堂^{たう}
 の^の使^し未^まて^も這^こ編^{へん}の^の序^{しよ}と^もこ^こも^も其^{その}稿^{こう}い^いも^も成^なら^るむ^も然^{しか}る^るを^も吾^{われ}家^かの^の路^ろ婦^ふ
 等^ら叨^{たう}前^{ぜん}條^{じょう}と^も聞^き書^{しよ}と^も序^{しよ}に^も代^たり^ての^の取^とり^てと^も云^い烏^う倚^いる^る哉^や

弘化四年丁未夏五月念五

曲亭老逸





稲妻や團の
怒りや五位
乃聲
録芭蕉之句

稲妻遠四郎

飛鳥疾四郎



飛礫保元
後三町
稀百中
信人翁題

和田小十郎

正義

天目屋長良

日本書紀卷之三

日本書紀卷之三



狂津天女はなづか

狂津氣はなづか

狂津具はなづか

明月真如雲又
雨一切衆生黒
簡天
鵜齋老人題

和十六牡丹わじゅうむぎ

三十五重上川

74

大津



劍大刀けんたうをいれて
あそつとあふらけを
なましくしきま
大瓶乃ゆと
半人題

錦内也刀齋端高にしんないやとうしやうたんたか

蛇塚真武四郎へびづかまむすしやう

三十五重上川

大津

鴨のあけみどり夜
あつら鶴脛の長物
結たまふらき
愚山人題

鴨脚短平かものあし



牛鬼黒九郎うしおに

露玉満盆
池
萬穎荷荷
裏
蓑笠漁隠題

竹木虎狼たけき



能與池神女のり

新局玉石童子訓第六版自第五十六回至第六十回總目錄

○卷之二十六 第五十六回

押繪奮勇生拘十六郎 兄妹奏奇功進臨虎穴

○卷之二十七 第五十七回

虐政迫勇男女關囚牢 阿毘寺諸俊傑謁舊主

○卷之二十八 第五十八回

一炊榮華健宗受郡縣 分兵之計正忠放飛鳥

○卷之二十九 第五十九回

陣中召異二在津禍事 池水洗餘毒賤婦正論

○卷之三十 第六十回

魚丸對治妖魔興絕家 暗賢免命夜走三池邨

新局玉石童子訓卷之二十六

東都 曲亭主人人口授編次

第五回 押繪勇と奮て十六郎と生拘る

復説曾根見伍六郎健宗の料らむも怨ある。悪僕小雲大と較る果しく其憤

でと洩すそのめく。軌的と大刀自いかくても感醒されれば升が儘健宗を禁獄

まで當日近江へ遣一たる兩個の走卒。齒四郎と疾四郎がかへる來ぬるを俟

程小健宗の鋪野母子が鈍くも猶疑を其寛を解よりるけしむ。或は罵り

或は咬く怨訴の背の癖の似てゐる口支那方が居る屈くべし。小あらび

る牢舎小起臥去れれば。便をひきりけり。余程小韓錦樞二郎は他より前

あて人の性の善多所。あつあつ死るるら。健宗の這回の罪は後解
 るよりありとも。縦二郎の縲綫の饒さるをうけはへし。と思ひ返者えり
 かりける。案下重説這時縦二郎が白猪の宿所あり弟押繪のいふ
 日小仲兄八重作も今番の禍鬼と告て咽返ええと。鶴脛奈我四
 郎と妙義の和正忠許遣去し徒小日と経ぬる而已他がふかり來
 ざりしかばいふくと思難てそのを里長小告知せ又見越松時八を招
 びよせて問試る小時八も眉を擡めて然りとそののされ妙義の其路遠
 もあらぬ奈我四郎が死しより早三四日小るれども今將信あると
 る死に必是故あるべしと思ふのそと猶日と過ぎ轍の鯽魚より危ふ
 かるべ死我師と縦二郎の呵責の答不堪命果敢やうとあらば後悔何
 も及ぶ死ん身も知れ如く鴨脚短平の鶴脛の弟子も最老實なる

壯校るも今朝も他あり留さるて又妙義へと遣たり縦那里小
 障ありて八重作哥も奈我四又今猶かへ來かとも明日の必音耗あ
 らえそれよりも猶慨し死の我師の林示獄せられ始より飯を獄舎へ餽るを
 まら禁めて饒させぬわが我師の安危を問ふべくもあらば里長刀祢と誘
 へく。悄地小風の便とせし我師のやうに西三度呵責の答不捷懲されて
 苦痛のいづくもあらざりし其杖傷一夜の間小餘波もあらば愈し幻術
 小のやと疑れけんその後牽出されて責懲さるるこるけん彼身の倒々最
 安くて恙あらざるとせえたり。その思ひ屋のひそと叫告る人の誠小押
 繪の僅小慰められて原來大兄の杖傷の一夜の間小瘡けり那折きも
 身小附らまじる。仙丹不測の即效るんと思ひるがらも明々地小言ふはま
 べ死時宜らねば笑ひ屢領くのも。絶小眉を閉けける。その日も昔者て次の日も

亦其次の目も妙義より短平まらかつたまを押し給ひあらん時八もさうく
訪来て便るを且呆ま且訝る而已鄙語云木乃伊採の木乃伊中も
やうけん噂をきても影刺さぬ五月の天の厚曇晴ぬ思ひ胸安ら
ぬ押繪の單留守の宿書置の四隣の人々うち守られ夜に亦其家々女児
も不成せられ明も開も里長の杖を這宵の五保甲其乙其の
女房四名許と天目屋磔助と喚做したる磁器徑紀の女児小其名を
長良と云ふ二八をうらうら少女も相番や韓錦許集合よぬれ押繪を
他もと旁や蚊駈火盤の馳走の一種茶と者て差ゆるとあや開が中
彼天目屋の女児長良の容止醜らぬ心艶めく癖なれや白粉
許厚化粧して京染の浴衣緋太織の帯掛たる時の流行はあやさ
るるれば自餘の家々もうち笑ひて茄子圃小只一箇ある冬丸をた

の
罵めれて笑ひと攬も短夜の四表八表話説深初て三更との鐘の響え
まより多辯の言語寡く做りて弱はれは老も皆舟漕小動
の磯の見るゆも内れて打盹さる者あるとまれば蚊駈の煙り絶果て刺を
蚊の桃の淡く如く打ば鮮血小身と染て研られ夢を結ぶらんと思ふ
押繪の痛痛さ先門の戸を楚と鎖て行燈引提て片隅へ直し行燈心
挿立る却納戸も廣やうる一張の櫛を小く開ぎ儘坐席小華下が
衆女子の我ゆもあらね守まる押繪ふもせられて有斯下と六知るやも
るく軒中人を教馬をまて肱枕して臥されば押繪の刺を蚊と拂難てあら
ともく其櫛小入り脚方不在の詞敵のあらまるとる耳小氣の漏く蚊
叫び蚤小刺さる夏の夜の貪睡るれば寝といふ憶を一霎時目睡け小
程小盗見白目鳥十六郎の曩小鋪野郡司範的小邪慾の機密を弄しより

那鋪前の短刀を以て韓錦擬二郎を無實の罪に陥れ尚且他が一家事な所。
 男女遠く、飯小あて、單彼相公の恋説の、抜多とやらん少女と搔擻ひら
 將て、情地相公進せざる、約束錯へ、賞財の百も二百も、ゆが、か、る
 と、疎忽、下さ、毛を吹て、疵を、未、先、那果の光景を、克、覘、果さ
 び、い、便宜を知るよう、あらんと、尋思、多、韓錦の禁獄せられ、其次の
 日、夜、毎、潜、彼家の門、立、背、門より、張、女子、毎、五六名、集、合、て
 在らざる、宵、い、な、れ、是、を、彼、抜、多、と、喚、做、を、美、女、多、と、思、ふ、ら、の、少、女、と
 絶て、見、る、と、な、れ、情、地、か、望、と、夫、を、猶、も、夜、と、累、る、程、は、這、宵、押、合、成
 志、ぬ、五、保、の、家、々、毎、天、日、屋、の、女、兒、長、良、と、調、戲、し、其、名、を、屢、喚、ぶ、と、十六
 郎、物、の、隙、より、洩、奔、り、覘、看、る、小、鄙、語、小、云、夜、視、遠、眺、也、長、良、が、面、色、艶
 然、ら、る、其、被、物、今、様、也、鄙、語、稀、る、美、女、と、や、見、て、け、且、其、名、の、長、良、と、喚

ろ、と、抜、多、と、あ、も、少、秘、ち、て、是、を、け、り、と、思、ひ、ぬ、十六、郎、の、質、夫、と、猶、も、其、頭、小
 願、て、在、り、小、夜、の、深、る、と、俟、程、小、夏、の、夜、る、れ、短、く、と、子、二、刻、時、候、ふ、る、り、
 小、婦、女、們、の、皆、睡、け、ん、軒、の、聲、の、も、高、や、う、と、或、の、石、臼、と、挽、く、如、く、或、の、播
 盆、と、拓、ふ、似、て、咳、え、も、も、若、る、れ、十六、郎、の、折、を、と、り、れ、と、庖、漏、の、方、小、赴
 いて、入、る、死、隙、と、求、る、小、其、頭、小、三、尺、の、紙、窓、の、紙、上、か、る、と、も、拭、て、その、竹
 格子、と、破、棄、る、小、敢、毫、も、音、た、て、ま、素、より、堀、と、乘、穴、隙、を、鑽、ふ、自、由、と、な
 たる、盗、音、の、本、事、の、今、ゆ、ら、い、べ、も、あ、ら、ん、其、首、も、内、り、と、潜、入、り、と、搔、擻、を、情
 や、う、小、件、の、坐、席、小、入、り、て、見、る、小、這、里、あ、り、在、明、の、燈、火、あ、れ、揮、散、る、小、做、も、易
 る、况、四、五、箇、の、婦、女、們、の、無、た、る、慚、の、内、か、あ、ま、い、囊、の、物、と、取、る、も、も、か、さ、り
 あ、ら、ぬ、枝、る、り、と、思、ふ、十六、郎、の、胸、の、内、と、透、見、て、又、思、へ、ら、く、這、夜、北、と、結、果
 けて、後、少、女、と、搔、擻、る、背、安、似、れ、と、尚、怒、て、緊、要、の、貨、物、小、瘻、を



文藝堂主人



文藝堂主人

負せる後悔何ぞ及ぶ先那後を捕らんと布囊を銜せ両手を縛りて
 間も退け在らせたまうて後婦女毎に取らぬ櫃共侶の玉を推し悔
 りぞとて妙なるべしと思ふも悔の下に拾起し衝と入りて臥し長良の胃
 前を極柄と曳寄れば驚覺て吐唾と叫ぶ聲立ち布囊を銜せ
 腋を焚と抱えて走るとあける程もあらぬ押繪の蚤を刺し行燈の灯
 光を盗見入りぬと見てければ高きも噪ぎ腕を伸くと既半身悔し
 十六郎が左の踵を焚と捕らえて聲高やうと皆さま起絲盗見入りぬと喚び驚
 く十六郎の両膝衝て憶ふ抱え長良と投退て捉られ踵を蹴放さる
 身と揉反して腰を又と抜んとあける那時遅し押繪は速く衝て走る
 其心と捉りて掖投し管子も抜けんと投し十六郎の云と走りぬ身と空
 さまふ筋手りて醫杵搗て平張時腰を又の空走しと鞋の帯を送

このゆを驚き覚げ。四箇の家々も胆と淡して叫んとする小齒も人星
 亦只物の怖し一箇小身と縮して異口同音南無阿彌陀佛弥陀佛
 弥陀佛弥陀佛と唱る聲も相夜の中似方刺裳露の間の生る心地
 せりける有斯一程十六郎の女子と思悔りし押繪が剽捷向ふ前より
 身の口弄丸を取る像く投伏られても猶徴をまふ他も亦覚ある異來雄る
 且差して疼痛と忍身と起來て又を合する不逞なれ疾視哮る聲も
 尖く這賽鞞繪奴我由断しと蹴られ輾ひもあられ今番も既を覺
 期とせんと馬りながら巻を揚て打倒さんと度より鬼を捕繪の喉を
 反してその多子と合禁して左と刺て引組ら十六郎の色黒く骨逞し大漢
 中楮塗の金剛神小異るま押繪の二八の少女中花の容顔雪の肌膚立
 雙て節瘤松集白鷺不彷彿れとも天の生做を勇婦の本性矧亦その日

来面箇の家兄の大刀筋は角能白打も看倣して筋力の素より義秀親
 衡中も敵より不足る一期の本事とてこの人の知らざる一ふあの時をわけて著
 多角腕の擗は十六郎何で勝よりわんや面緒や多力と哀や推仆
 さまぐ欲されども阪小車と遣如く押繪の毫も身と動さ推ね推糸と合
 笑るが思ひの随小疲らせ十六郎の糾るが如く腕衰息吐あせ泥小酔ふ
 たる鯉魚小似て眼眩とて御る系引外と逃さき小押繪の捉るまで
 緩め程あそよれと其機と揣りてやと聲被て又投しお十六郎の阿
 とむり小柱小頭顱と打傷られて眼眩は起るも當下押繪の柱小拭
 たる麻索一條解下しと起んと蠢く十六郎と起りも果さ面を縛りて突
 と牽立て檐廊より真中柱へ推附て團々纏あをさるける小程小五保
 の家々も長良三思ひするは押繪の勇悍他一人小極れて俱小賊難と免

且下その款いひくもあは且敬駕は且是れて共小押繪と旁小程小長良の口小衝ら
 れる布囊と左右と掖中云云とあつる夏の趣と生て腮と撫麻れが家々
 悪棍小疑る然れがあをれ長良少女の上流つ艶め夜化粧の單花はだは故
 擇採あせられけん危かられとち笑へ押繪はやと推禁めは外もあは知
 する所あり奴家孰々這奴と相小他いぬる宵家兄の留守小彼短刀とてあは
 兄と罪小陥れる檻見小克肖するその甲夜闇を認るまはあはれは彼
 吭小大なる舊瘡の迹あを覚るは這奴の吭も舊瘡あり況身材の最高
 かる聲音のよく似れが向いでも知るは彼夜女の檻見する小疑るいごと
 片も御高小十六郎が鞋走したる双とあはら合揚て引提て佐と立向ひてはれ
 檻見小裏小彼短刀とて来て這首投入れて我大兄と罪多しは間諜見

釜くも其首と逃去りし異日件の奴隷を捕捕られ廳小牽れて久く獄
 全言あり一更まで招了して亦のさう地獄も價をたわぬる日思ひけるも
 我身の庭小牽れ出されて鋪野殿の云と憑ませぬ機密の二條の身は罪を
 饒されて彼短刀と授られの夏衣之圓金一枚賜りしが辨去りて形の如く計
 ひら此の屋主主人韓錦を旨く陥れれども餘の一條は暴拵也。這里る男女を
 軼ふと拔ると喚做を一箇の美人を生捕りて將てまわらば賞禄の乞ふ依
 んとある相公の密意の大吉利市更皆樹よく做果えと思ひ夜毎小潛來て
 裏面の容子を張いし婦女子のまを男子の見えを開が中二八たるの少女も一
 箇さるあねど其名と押繪と唱るれば相公の情地小故一の抜るらぬと曉
 るて猶も便直と現ふ程の今宵の二箇の増花あり。身のさの艶めけて容止も醜
 うらま其名と唱と洩すふ宛抜るといふ似れ他るべと思ひ更蘭人定

して唐漏の窓より潜入て見れば無なる櫛の内小皆眩枕しく睡りて在り先
 彼抜ると曳出て後小自餘の婦女等と軼ふあべと尋思とある櫛中も潜
 入りつ那少女と曳出さす甘程小鈍や和女郎小脚を捉れて刺慘く括られ
 去竊盗盗買加小竭るるらん早く御館へ牽せやと去向をいそぐの軌的の必
 や法度を枉て樹よく首と續るるらんと情地小負し思へん押繪の更の趣を
 憶ひて駭嘆して原來の夏四月の時候防守翁と打擲しく目え脚え傷
 ずの鋪野殿の奴隷の所為を其折考老と搔攪し白目鳥雨でありけり開
 のるるも今宵亦拔る長良の語路相似うとも思ひ浅慮小聞錯しは笑ふ
 べとのひら軼て臂近る視相と曳と各て其頭小あける鼻紙小十六郎が招
 了の事の條々漏限る猶幾番の同質り書写し稍写果て儘の筆と閣
 く程小阿甦寺の鐘鐺々と早丑ふありけり。浩る折る外面小人幾名款束

ぬるわりの。忽地聲と震立て。妖々よ蚤く起ぬ。八重作哥を將て来り。疾用と
 呼門ふと向りても知る。鶴脛奈我四郎と。思ふ押繪の志をまゝ家々
 一応と答へて身と起き者。二兩名遠く鎖と外へ先とたうり。戸を推開れ。八重
 鞋と脱捨て。找入る者。別人さる。八重作次世と首を。大江杜四郎成勝峯張奈
 六通能等と俱。小鶴脛奈我四郎鴨脚短平も。相従てかへる。奈我四郎引
 提する挑灯弗と吹滅程。小押繪いりて。立迎へて。家兄叔ら各めり。大江王峰
 張主も。よれたらう。おとせ。侍れ。脚力と二度まで。おわら。お思ふ。お似せ。遅り。必
 故の。支る。下。との。間。小八重作の。大江王僕と。客坐。お找めて。檐廊の中。柱。小綁
 着られ。方。十六郎と。敬目。小懸々。坐と。占れ。奈我四郎と。短平。の。背。駝。裏と。解
 下。の。拭。を。の。脚。と。拭。て。俱。小八重作の。後。方。小居り。當。下。八重作の。押。繪。向
 ひて。敬。馬。思。小。大。兄。の。災。難。恨。く。お。遅。り。けれ。ば。時。日。後。れて。通。宵。走。り。か

へ。来。小。け。の。我。の。る。と。大江。峯。張。而。君。子。の。假。棄。ぬ。る。俱。小。杖。を。回。れ。る。心
 つ。の。思。ひ。わ。の。い。へ。成。勝。通。能。の。膝。と。找。め。押。繪。向。ひ。て。不。慮。の。真。實。患。を
 云。云。と。彼。一。語。此。一。語。奈。我。四。郎。と。短。平。の。使。小。卒。彼。折。小。人。々。和。田。許。在。を。
 尋。托。つ。日。と。過。した。事。の。始。末。の。箇。様。々。々。如。此。々。々。と。告。る。程。小。四。角。の
 家。々。々。の。長。良。と。共。小。火。盤。小。炭。と。吹。起。し。て。茶。と。煮。復。し。て。薦。め。る。と。と。然
 と。奈。良。樓。八。重。作。の。迎。小。立。け。鶴。脛。鴨。脚。等。小。逢。せ。る。て。今。宵。々。々。々。
 かの。来。小。ける。其。顛。末。と。原。る。小。八。重。作。の。ゆ。比。大江。主。僕。と。共。小。季。彦。又
 女。と。送。る。と。和。田。正。忠。許。赴。せ。て。還。留。り。ま。え。か。を。折。ら。北。武。藏。々。々。々。
 山。小。野。豬。躬。獨。あ。り。と。呼。ぶ。と。大江。主。僕。の。と。見。て。来。んと。主。人。小。告。げ。し。出
 ち。ま。は。是。小。より。八。重。作。も。季。彦。と。共。小。ゆ。んと。只。管。去。向。とい。え。死。か。主。人。和
 田。十。郎。正。忠。も。我。御。導。小。立。んと。猛。可。小。路。次。の。准。備。と。多。主。客。甲。乙。俱。小

五名伴當一名許從へて彼山投てゆくゆえに。その次の日奈我四郎と正忠許
 尋来の主の女房と扱ひも小事云ふと知りて。平ぐ儘居る候べくもあらず。
 その詰朝辭去りて將座投ていづく程最慌し折る。その山の名は聞
 愆く路異るれ早ふ沼逢き。余後鴨脚短平も再度の使ふ立られて正忠許
 赴くも。只直走り走る程の脚の凡と蹴放さる正忠許也り就け。その夜
 猛小腫痛て進退自由ならされ鶴脛と追蒐て俱小彼山小くくもあらず。
 左右も程小八重作王客五名の両三日彼山在り俱小躬湯と見盡しと伴當
 将妙義ある宿所へ来る程小鶴脛奈我四郎へ路次小迷ふて日過り。
 這時急うやく遭て欬も多し且恥て白猪の異変と告げ。八重作は
 もあらず成勝通能李彦正忠孰秋驚患いさる奈我四郎を相俱し。
 その次の日れ曠は小宿所へ来る程小短平の脚の指の跌瘡稍愈

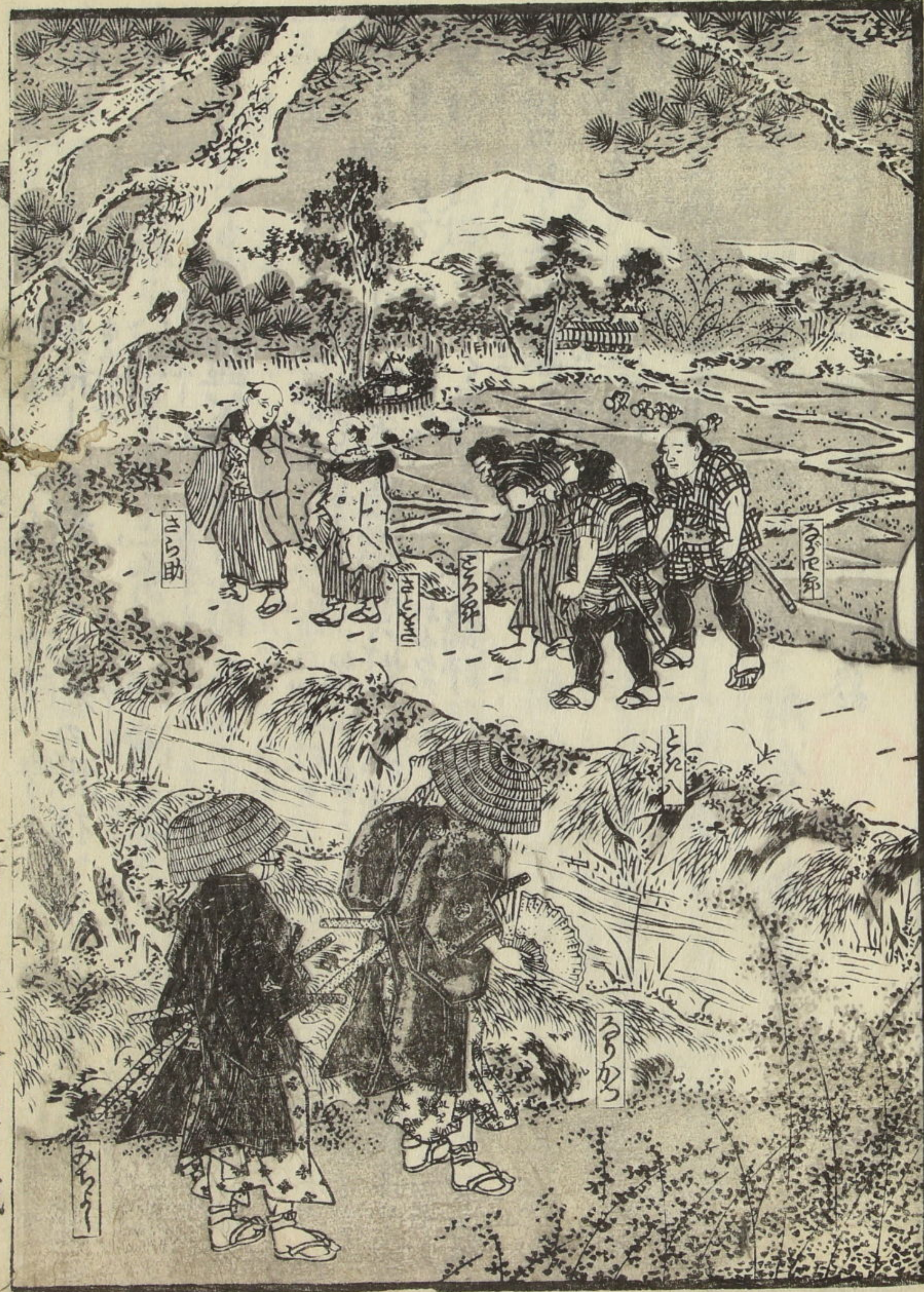
去久和田の宿所を辭去りて又彼將座と投ていづく程最慌し折る。その山の名は聞
 やへさくら。かの夜ま。八重作多し彼山よりかへ来る程小逢き。押繪章俟不樂する白猪の消
 息と告知る且見越松時への口状を傳へると。鶴脛と共侶小八重作多し
 相俱し。この宵から来る程小押繪の件の顛末と茲小下りてゆ知て日屬の
 疑惑稍解て却今宵料らる。一箇の盗兒と生拘て毆てその来歴と告知
 する。我大兄と救を乞便宜と云ふ。其故如此と云ふ。その件の白日
 奪十六郎と毆て招了の一五二十曩小防守叟と打擲する。鎮野殿の奴隸
 の所為とて折考老と竊畧一の件の盗兒十六郎を彼相公の密意小依
 て扱ふ少女と畧奪り。自餘の男女と送る。取合せも欲しける。扱ふ長良
 の名の錯誤さ。他招了の條々と方儘写着。その其書と八重作多し見
 まる。自餘の家々も長良と今宵と下りて知押繪の力藝武勇在

昔の勇士ゆも劣らざるべし。只管稱て已ざりける。是と云ふは、奈良櫻
 八重作の歎びゆら成勝通能奈我四短平。智あるも智あるも笑片向て我
 今來ぬ時那暴雄中柱小殿系れと見えなく故あるぬと思ひいかども人我
 言の言ふればと問ふ暇多り。小驚思ふ押繪少女の武勇よりく女子
 們的死を免れり。さるる韓錦を救合る。元照人を獲てける。一大功といふべし。
 天も明へ里長小告て領主小告訴せん。噫芽本いと血染言のさる詞も異
 らぬ。主客齊一散動にけり。有斯一程。短夜の早曉天ふり。家々
 薪水と資んとて立ち。庵福ふ赴く程。八重作押繪大江主僕。路次
 の疲を慰めん。次の間小伴。奈我四郎と短平。猶舊室に在りて。十六
 郎とそうち守りける。登時杜四郎成勝。八重作押繪。不叫く。やうが
 如た。那十六郎。韓錦主と救合る。元證人。さる勿論。さるも素是郡

司の間謀見も。彼謀計小依る者。それ彼首。牽りて。と云ふ。言と易く
 偽る。然れは。是も亦知るべし。況郡司の奸虐。火をりて。水小做さる。あら
 訟一朝。定りか。げん。然ら。和殿兄妹の外。訟訴人の言を好と。大の言を
 思ひぬ。さや。といふ。通能も。共ふ。小守。曩小防。守叟も。和田生も。這地の異変を
 安知り。その驚駭。大なる。坐す。物と思ふ。さる。已。推。續。て。白。猪。を
 いる。これ。か。通。宵。吹。と。走。ら。む。も。久。か。む。と。必。多。く。一。邊。莫。主。兄。妹
 の。苦。訴。の。為。彼。廳。へ。十六。郎。と。牽。り。て。ある。時。件。の。両。翁。の。來。臨。せ。不。便。の。を
 あらむ。ざら。ぬ。と。八。重。作。有。理。と。応。て。然。ら。奈。我。四。郎。と。短。平。と。天。明。て
 後。路。次。を。出。て。防。守。和。田。の。兩。翁。小。有。つ。る。支。の。趣。と。告。げ。く。あ。ら。む。を。ゆ。さ。せ。ん
 候。と。相。譚。ふ。間。天。明。て。鴉。の。屢。鳴。く。聲。を。れ。奈。我。四。郎。と。短。平。と。開。く。前。後。の
 板。戸。の。音。も。生。平。よ。り。最。勇。一。家。々。の。既。小。炊。果。る。朝。飯。の。饌。建。て

押繪共侶長良さへ出て出く主客小薦ひる混雜涯るるける。左右より程小五
 月霽の朝日出く風猶涼に辰牌さうり小天目屋磔助等の五保の代と家々
 多小睡らせんと各々出て来り又見越松時八の目韓錦の家成る里長
 五保等の食料と握飯煮漆物さ二三重なる漆櫃小飲め乾見が力
 士小搭駝きて韓錦許来ぬ程小里長も亦彼宅の安不と檢輪の爲小とを
 うう出て来れば料ら衆皆集合て八重作等小對面多昨宵押繪が
 武勇の掙に盗見自日爲十六郎と生拘より韓錦の寃屋の罪と解より
 ると等々進て胆と淡して皆相賀して喋らたり開中里長々八重作
 ら共侶小檐廊の邊小出て縛られる十六郎小其招了と二人向小十六
 郎小弱果と敢て偽ることゆきその所下めの如く既小押繪が写着る
 條々小異るるねハ里長ハ然もあそとと恥て一室小退れて八重作等小相譚

訴状とのりるどまる程小憶つるも時と程しく亭午の時候小ありか
 時八小押繪小告げて齋なる握飯煮漆物を里長五保等小薦果々その
 残れると十六郎小喫する小縛るる肱と饒る飯も菜も小串れて他
 飽まで飼けるを見る者笑ひぬるるける是より先小鴨脚短平々八重作小
 吩咐らまき防守和田と迎んと其路次までおける小あの時りまかり
 そを俵へ死小おられ大江主僕八重作押繪の時八奈我四郎等共侶小晝
 飯と果一衣裳と敷きて郡司の館へおとせり小里長并小磔助ハ長良の支
 あれ俱小御館へおとす自餘の五保等の留守せんと時八と奈我四郎小
 盗見十六郎を牽立させ彼館投く赴く小訴訟人ハ都々六名成
 勝と通能と笠深く戴れて如雲如月を従ひける作者曰前板第三
 十二回孟林寺の段小大江杜四郎と峯張茶六が両箇の盗見狸毛吹五郎



ひろとあやくやう
 白日鳥悪報
 変とく屠所
 の羊小做る

三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十

三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十

低杭駝鳥太と生物いこのだちろうとより料しやうを疑獄ぎぎくの照据あしとゆてえ其藝あひ六市ろくしち四摠しよちゆうを
 さらあひ朱之しゆ之の人ひとを救ませられとまの段だん押繪おしゑが盗見たうけん白日はくじつ鳥とり十六郎じゅうろくぢやうと生物いふ
 より料しやうらまぞまも冤あやの證しゆとゆてえ其兄あに擬な二郎にじやうの冤獄あやと啓ありまると事ことの趣小しゆせう
 多く相似あひくま大おほ小こ異いえとを何なにといふ駝鳥太吹だちろうと吹ふ五ご三さん好職善こうしやくぜんの回謀わいぼう見けんあらはらし
 且非義またひぎの義ぎを知る者しるもの之の況ま木き工頭職善くわうとうしやくぜんハ奸虐邪慾けんぎやくじやくよくの酷吏こくしあらはらし只其才足ただそのさいじゆら
 ざる故ゆゑ疑獄ぎぎくと久ひさく悟さとるは是こゝを錦野郡司にしんよぐんじ範はん的てきの比ひれハ雲壤うんじやうとの差さあり
 範はん的てきの仍なほ所ところ邪慾じやくよくあらはらして盗見たうけんとゆてえ韓錦かんしんといふは陥おちれると日ひといふは同おなくなるは語ことばるは
 くらべかる奇對きたいハ水滸傳すいぽでんの中なかあらはらして好看こうかんる者しるものハ作者しやくしやの自注じゆしゆと俟まちていふは
 自知しぢらは畢ひ竟けい八重作やちやうさく押繪おしゑの訟しやうハ十六郎じゅうろくぢやうを牽ひりて思おもひて範はん的てきの奸詐けんせつを
 折おくは後のちの吉函きちわん甚た麼まをいふは開あき下回のち小鮮せうせん分わるはと聽き絲いとかし。

新局玉石童子訓卷之二十六終



